

健康文化

平和への願い

今井田 二三子

十二月八日、何の関連もなく、あの暗い第二次世界大戦の始まった日であったことが私の脳裏をかすめました。しかしその日私の診療所を訪れた人も、道で行き交った人々も誰もそれを口にされませんでした、もうそれは遠い過去に小さくかすんでしまって、平和で明るく豊かな暮らしが普通になっているのに流れた歳月の長さを改めて感じました。

しかし一方では、今もテレビのニュース、新聞は連日のようにイラクの戦い、テロ、更に自衛隊の派遣について報道しています。

かつて聖戦の名の下に、我が国のとった行動が正当化され、美化されて一方的に伝えられた私達は、国を守るために戦うのが国民の聖なる義務と感じていた時が思い出されます。

イラクの一般の人々には今どのような情報が、どのように伝えられているのでしょうか、戦争というのは常に各々の側が自国の行動を正当化して伝えているとすれば、自分たちの本当の気持ちも分からなくなっているのではないのでしょうか。

また、自爆テロの報道を目にする度に、かつて特攻隊として搭乗機と共に相手国の戦艦に突込んだ若い隊員のイメージが重なります。これが国に対する忠誠と信じて再び還ることのない飛行、当時は畏敬と感動でそれを聞きましたが今はそれを思うと胸が痛みます。

三十数年前に訪れた高野山の参道近くの特攻隊員の慰霊碑の前でつぶやくように予科練の歌を口ずさみながら落ち葉を拾い集めている老婦人を見かけたことがあります。半ば恍惚とも思われるその行動は還らぬ我が子を偲んでの落ち葉拾いだったのでしょうか、その歌声はかぼそく歌詞とはうらはらに哀調を帯びたものでした。胸のしまる思いでその場を離れたのが思い出されます。

イラクの自爆テロの青年達も今は崇高な理念の行動であるという思いがあるのかもしれませんが、平和が訪れたとき、どんな思いが子を失った両親の心の中に浮かぶのでしょうか。

戦争末期の頃の私達は戦国時代のような竹槍で敵を倒す訓練、消火のためのバケツリレー、食事は米、麦、大豆の混合した主食、甘藷、副食は岩塩の水溶液、不気味なB29轟音、爆弾の地響き、炎上する岐阜市の空を遠く眺めるなど、空襲で命を落とした先輩もあると聞いております。

年末のデパートのあふれる商品、スーパーの色彩と種類の豊富な食品棚を眺め、現在も戦中の日本に近い生活を強いられているかもしれないイラクの人々に思いをはせずにはられませんでした。

話し合いのトレーニングを幼い頃より受けている国の人々、客観的判断を下すことのできる国連の関係者、外交を任されているスペシャリスト、どうして戦争の終結、平和に向かったの話し合いができないのか不思議な気がします。不戦を宣言し、武器を捨てた日本の人々がまた戦場近くへ支援の名の下に出向かねばならないのか、すでに犠牲者をだし、今また、出すかもしれない戦いの終結を願うのは私だけでは無いと思います。

(内科開業医)